

庭

太宰治

青空文庫

東京の家は爆弾でこわされ、甲府市こうふの妻の実家に移転したが、この家が、こんどは焼夷弾いだんでまるやけになったので、私と妻と五歳の女兒と二歳の男児と四人が、津輕の私の生れた家に行かざるを得なくなつた。津輕の生家では父も母も既になくなり、私より十以上も年上の長兄が家を守っている。そんなに、二度も罹災りさいする前に、もっと早く故郷へ行つておればよかつたのにと仰言おつしやるお方もあるかも知れないが、私は、どうも、二十代に於いて肉親たちのつらよごしの行為をさまざまして来たので、いまさら図々ずうずうしく長兄の厄介やっかいになりに行けない状態であつたのである。しかし、二度も罹災して二人の幼児をかえ、もうどこにも行くところが無くなつたので、まあ、当つてくだけろという気持ちで、ヨロシクタノムという電報を発し、七月の末に甲府を立つた。そうして途中かなりの難儀なんぎをして、たつぷり四昼夜かかつて、やつと津輕の生家に着いた。生家では皆、笑顔もつを以て迎えてくれた。私のお膳ぜんには、お酒もついた。

しかし、この本州の北端の町にも、艦載機かんさいきが飛んで来て、さかんに爆弾を落して行く。私は生家に着いた翌あくの日から、野原に避難小屋を作る手伝いなどした。そうして、ほどなくあの、ラジオの御放送である。

長兄はその翌る日から、庭の草むしりをはじめた。私も手伝った。

「わかい頃には、」と兄は草をむしりながら、「庭に草のぼうぼうと生はえているのも趣おもむきがあるとも思つたものだが、としをとつて来ると、一本の草でも気になっていけない。」
それでは私なども、まだこれでも、若いのであろうか。草ぼうぼうの廃園は、きれいでない。

「しかし、これくらいの庭でも、」と兄は、ひとりごとのように低く言いつづける。「いつも綺麗きれいにして置こうと思えば、庭師を一日もかかさず入れていなければならぬ。それにまた、庭木の雪がこいが、たいへんだ。」

「やつかいなものですね。」と居い候そうろうの弟は、おつかなびつくり合あい槌づちを打つ。

兄は真面目まじめに、

「昔は出来たのだが、いまは人手も無いし、何せ爆弾騒ぎで、庭師どころじゃなかった。この庭もこれで、出鱈目でたらめの庭ではないのだ。」

「そうでしょうね。」弟には、庭の趣味があまりない。何せ草ぼうぼうの廃園なんかを、美しいと思つて眺ながめる野蛮人だ。

兄はそれからこの庭の何流に属しているのか、その流儀はどこから起つて、そうしてど

ここに伝つて、それからどうして津輕の国にはいつて来たかを説明して聞かせて、自然に話は利休りきゅうの事に移つて行つた。

「どうして、お前たちは、利休の事を書かないのだろう。いい小説が出来ると思うのだが」。

「はあ。」と私は、あいまいの返辞をする。居候の弟も、話が小説の事になると、いくらか専門家の氣むずかしさを見せる。

「あれは、なかなかの人物だよ。」と兄は、かまわず話をつづける。「さすがの太閤たいこうも、いつも一本やられているのだ。柚子味噌ゆずみその話くらいは知っているだろう。」

「はあ。」と弟は、いよいよあいまいな返辞をする。

「不勉強の先生だからな。」と兄は、私が何も知らないと見きわめをつけてしまったらしく、顔をしかめてそう言った。顔をしかめた時の兄の顔は、ぎよっとするほどこわい。兄は、私をひどく不勉強の、ちつとも本を読まない男だと思つているらしく、そうして、それが兄にとつて何よりも不満な点のようであつた。

これは、しくじつたと居候はまごつき、

「しかし、私は、どうも利休をあまり、好きでないんです。」と笑いながら言う。

「複雑な男だからな。」

「そうです。わからないところがあるんです。太閤を輕蔑しているようでいながら、思い切つて太閤から離れる事も出来なかつたというところに、何か、濁りがあるように思われるのです。」

「そりや、太閤に魅力があつたからさ。」といつのにやら機嫌きげんを直して、「人間として、どっちが上か、それはわからない。両方が必死に闘つたのだ。何から何まで對蹠たいしよ的な存在だからな。一方は下賤げせんから身を起して、人品あがらず、それこそ猿面の瘦やせた小男で、學問も何も無くて、そのくせ豪放絢爛けんらんたる建築美術を興おこして桃山時代の榮華を現出させた人だが、一方はかなり裕福の家から出て、かつぶくも堂々たる美丈夫で、學問も充分、そのひとが草の庵いおりのわびの世界で對抗したのだから面白いのだよ。」

「でも、やつぱり利休は秀吉の家来でしょう？ まあ、茶坊主でしょう？ 勝負はもう、ついているじゃありませんか。」私は、やはり笑いながら言う。

けれども兄は少しも笑わず、

「太閤と利休の關係は、そんなものじゃないよ。利休は、ほとんど諸侯をしのぐ實力を持つていたし、また、当時のまあインテリ大名とでもいうべきものは、無學の太閤より風雅

の利休を慕っていたのだ。だから太閤も、やきもきせざるを得なかったのだ。」

男ってへんなものだ、と私は黙って草をむしりながら考える。大政治家の秀吉が、風流の点で利休に負けたって、笑ってすませないものかしら。男というものは、そんなに、何もかも勝ちつくさなければ気がすまぬものかしら。また利休だって、自分の奉公している主人に対して、何もそう一本まいらせなくともいいじゃないか。どうせ太閤などには、風流の虚無などわかりっこないのだから、ひょうぜん飄然と立ち去って芭蕉ばしやうなどのように旅の生活でもしたら、どんなものだろう。それを、太閤から離れるでもなく、またその権力をまんざらきらいでもないらしく、いつも太閤の身边にいて、そうして、一本まいらせたり、まいったり、両方必死に闘っている図は、どうも私には不透明なもののように感ぜられる。太閤が、そんなに魅力のある人物だったら、いつそ利休が、太閤と生死を共にするくらいの初心うぶな愛情の表現でも見せてくれたらよさそうなものだとも思われる。

「人を感激させてくれるような美しい場面がありませんね。」私はまだ若いせいかな、そんな場面の無い小説を書くのは、どうも、おっくうなのである。

兄は笑った。相変らずあまい、とでも思ったようである。

「それは無い。お前には、書けそうも無いな。おとなの世界を、もっと研究しなさい。な

にせ、不勉強な先生だから。」

兄は、あきらめたように立ち上り、庭を眺める。私も立って庭を眺める。

「綺麗になりましたね。」

「ああ。」

私は利休は、ごめんだ。兄の居候になつていながら、兄を一本まいらせようなんて事はしたくない。張り合うなんて、恥ずべき事だ。居候でなくつたって、私はいままで兄と競争しようと思つた事はいちども無い。勝負はもう、生れた時から、ついているのだ。

兄は、このごろ、ひどく瘦せた。病氣なのである。それでも、代議士に出るとか、民選の知事になるとかの噂うわさがもつぱらである。家の者たちは、兄のからだを心配している。

いろいろの客が来る。兄はいちいちその人たちを二階の応接間にあげて話して、疲れたとは言わない。きのうは、新内しんないの女師匠が来た。富士太夫の第一の門弟だという。二階の金襴きんぷすまの部屋で、その師匠が兄に新内を語つて聞かせた。私もお附合ひざいに、聞かせてもらう事になった。明あけがらす鳥かさねと累身売りの段を語つた。私は聞いていて、膝ひざがしびれてか
なりの苦痛を味い、かぜをひいたような氣持になったが、病身の兄は、一向に平気で、さ
らに所望し、後正夢のちのまさゆめと蘭蝶を語つてもらい、それがすんでから、皆は応接間のほうに

席を移し、その時に兄は、

「こんな時代ですから、田舎いなかに疎開なさつて畑を作らなければならぬというのも、お気の毒な身の上ですが、しかし、芸事というものは、心掛けさえしつかりして居れば、一年や二年、さみせんと離れていても、決して芸が下るものではありません。あなたも、これからです。これからだと思えます。」

と、東京でも有名なその女師匠に、全くの素人しろうとでいながら、悪びれもせず堂々と言つてのけている。

「大きい！」と大向うから声がかかりそうな有様であつた。

兄がいま尊敬している文人は、日本では荷風かふうと潤一郎らしい。それから、支那しなのエッセイストたちの作品を愛読している。あすは、呉清源ごせいげんが、この家へ兄を訪ねてやつて来るという。碁ごの話ではなく、いろいろ世相の事など、ゆっくり語り合う事になるらしい。

兄は、けさは早く起きて、庭の草むしりをはじめているようだ。野蠻人の弟は、きのうの新内で、かぜをひいたらしく、離れの奥の間で火鉢ひばちをかかえて坐つて、兄の草むしりの手伝いをしようかと思うかと思ひ迷っている形である。呉清源という人も、案外、草ぼうぼうの廃園も悪くないと感じる組であるまいか、など自分に都合のいいような勝手な

想像をめぐらしながら。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：もりみつじゅんじ

2000年2月1日公開

2005年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

庭

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>